

WASEDA bungaku FreePaper

vol.026_2012_summer

わからん?! 文学

Wonderful BUNGA KU

温又柔

斎藤美奈子

松田青子

佐川光晴・玉川重機・

福永信→後藤明生

大澤真幸

キョウミナヲ

米光一成 + ナカシマカズユキ

青木淳悟

大原ケイ

¥0

カナの夏

温又柔

ヒグラシが鳴くと、母は私を突ついた。ほら、呼んでいる。私も、ほんとだ、また呼ばれている。母娘で、夏になると必ず交わすやりとりだった。カナカナカナカナ。ヒグラシの鳴き声が母や私には、佳奈佳奈佳奈佳奈、と言っているように聞こえる。私が、母に教えた。

——お母さん、あの鳴き声って、カナカナカナカナ、って書くんだよ。

母は初め、きょとんとしていた。けれども意味が呑みこめた途端、子どもっぽく声をたてて笑ったの

だった。それ以来、母の耳には、ヒグラシの鳴き声が、カナカナカナカナ、佳奈佳奈佳奈佳奈、としか聞こえなくなった。

「佳奈」が、私の名まえだ。ただし、十三歳のときからの。小学生の頃までは「黄佳芳」が私の姓名だった。中学に入学したときを境に、私は「横山佳奈」と名乗るようになった。

——あれっ、なんで名前が変わったの？

あの年、私たち一家は台湾人から日本人になった。

早稲田文学⑤発売!

表紙グラビア：松田青子 + 黒田夏子

「ちょうど十三年ね」

そう言ってしまったから、自分の口調がやや感傷的だったと思い、妙に気恥ずかしくなる。幸い、母は聞いていなかった。キャベツを切り刻む音が淡々と響く。この音が昔から好きだったと思う。もちろん母はキャベツ以外のものも切るけれども、母がギョウザのためにキャベツを切るときのこの音は特別だった。母は昔から、何か祝い事があつたり、大切な客がたずねると、水ギョウザをたつぷりとつくった。キャベツと鶏のひき肉を混ぜ合わせるところまでを母がやったあと、それをこねて皮に包む作業を、父や私が手伝うこともあった。父が包んだギョウザは具が多すぎて、私が包んだものはぺたっとしている。母のだけが、いつもきれいにふくらんでいる。

風鈴が鳴る。夕日が、テーブルのうえを斜めに射していた。天気予報が、明日は晴れだと告げている。

「佳奈ちゃんは晴れ女だもんね」

母が言う。私は母にむかって得意げに笑う。

「お母さんゆずりのね」

母が私と同じ顔で笑う。「独身最後の晩餐」には、母の水ギョウザ以外、考えられなかった。

会って欲しいひとがいるの、と切り出したとき、そりゃいいね、と父はことさらにおどけてみせた。私は苦笑いをする。立石さんに「プロポーズ」されたときの私も、とっさにおどけたのだった。あらいいわね。立石さんの口調はさらっとしたものだ。

——佳奈ちゃんがずっと傍らにいてくれるんなら、おれは一生、上機嫌だよ。

父も母も、自分たちの娘と結婚したいと言っているひとが、ナニジンであるか問わなかった。

——あなたの連れてくるひとは、きっと日本人なんだろうなって。ずっとそう思っていたのよ。

いつか母は言っていた。蒲田くんを紹介したときのことだから、私は二十歳になったばかりだった。大学の同級生だった蒲田くんとは二年近く付き合っ、ある日突然、別に好きな子がいるので別れて欲しいと言われた。それ以来、男のひ

と付き合う気にはなかなかなかった。ちょうど就職したばかりで目の前のことに精一杯だったのもある。会社に入って一年ほど経った頃、ふと思いついて中国語教室に通い始めた。立石さんとはそこで知り合った。

「でもねえ、まさか中国語ができるひとはね」

つくりたての具を皮にくるみながらこちらを見あげる母の目がいたずらっぽく光る。

「立石さんの中国語ときたら、あたしよりもじょうずだしね」

コンテナ運送会社に勤める立石さんは、大学時代に一年間、台湾の高雄で留学していた。高雄には子どもの頃よく行っ、と母が立石さんに話すのを聞きながら、私は自分の知らなかった母を感じてふしぎな心地にとらわれた。母方の祖母の故郷で、母のいとこやその子どもたちが今も暮らす高雄に、私はまだ行ったことがなかった。立石さんは留学中に教わった台湾語を披露する。チャアパアボ？ クンパー。アネオー……母も父も、立石さんの片言の台湾語に顔をほころばせる。

以前は台湾籍だったと立石さんに告げたのは、知り合っ、すぐの頃だった。元の姓は「黄」だと話すと立石さんは興味深そうに頷いたあと、感慨深げに咬いた。

——おれもね、小学校に入る前に、苗字が変わっているんだ。

親が離婚してね、それで、と目を細める。それ以来、母方の伯父が父親代わりとも言った。立石さんの伯父さんとお母さんはふたりきりの兄妹だった。

——またぞろ、熱心に中国語に励んでいると思つたら……台湾人のお嬢さんに惚れていたからなんだな。

立石さんの伯父さんの目尻に皺が寄る。伯父と甥の笑い顔はよく似ていた。

——兄さん、佳奈ちゃんは台湾のご出身といつても、日本で育ったのよ。台湾人というよりも、日本人みたいだわ。ねえ。

姑となるひとの言葉に私は笑みを返す。私の代わりに、本当にこの子はすっかり日本人です、と父が応える。その父に

むかつて立石さんの伯父さんが言う。

——わたいたちには娘がいないので、佳奈ちゃんと出会えて実に嬉しいのですよ。

「立石さんの伯父ちゃんのおかげよね」

「え？」

母の顔は夕日に照らされていた。

「佳奈ちゃんがドレスなんか着る気になったの」

「……」

式は、内輪のみの質素なものを予定していた。本当は式を挙げず、入籍するだけでもよかった。が、あの日、立石さんの伯父さんが眩しげに目を細め、佳奈ちゃんならどんな衣裳も綺麗だろうねえ、と言ったので、私はウェディングドレスを着ることに決めたのだ。

「普段からしゃれっ気のない子だなあとは思っていたけど、何しろ、成人式には振袖を着ない、卒業式では袴を着ない……」

母は喋りながらも、ギョウザを包むリズムを崩さない。私はといえば、ぼおっとしているとたちまち具をのせすぎて、皮が破けそうになる。

——日本人なら、だれでも知っているはずのことなのよ……記憶の底から浮かびあがったその言葉が、私の胸を締め付ける。

浴衣が着たいとねだったのは、私だった。ユカタ？ 母は、日本の女の子が夏になると纏うキモノの名前もよく分かっ、いなかった。それでもデパートで、白地に、赤い金魚の絵柄の愛らしい浴衣を私に買い与えた。お祭りの日、母からカワイイカワイイと見送られながら私はいそいそと出かけた。どうしても浴衣が着たかったのには理由があった。好きな男の子がいたのだ。その子もまじえた数人の友だちと神社でおちあう約束だった。待ち合わせ場所に着いたとき、その子——勇太くんが、ほんの一瞬、眩しげに私を見るのがわかった。心が火照った。私たちは小学校六年生だった。女の子同士、お互いの浴衣姿をカワイイカワイイと褒め合った。男の子たちも口にくそ出さないが浴衣姿の私たちと一緒にいるのが誇らしかったはずだ。みんなではしゃぎながら金魚すくいをし

たり、かき氷や綿菓子を食べた。誰かが、はからってくれたのだろうか。それとも、幸運な偶然だったのか。神社の長い石段の脇で、私と勇太くんは、ふたりきりだった。遠くで囃子の音が響いている。足が、少し痛かった。生まれて初めて下駄を履いたのだ。私は勇太くんに頼んだ。ちよつとい

い？ 勇太くんは私に見つめられてぎこちなくうなづく。その勇太くんの肩を借りながら、片方の下駄を脱ぐ。砂を落とす。勇太くんが笑う。

——足、ちっちゃいね。

今度は私が戸惑ってしまう。片足だけでいいの、と訊かれたけど、いいの、と小声で返す。下駄を履き直した私に、すわろつか、と勇太くんは石段を指さす。ん、とうなずくと勇太くんは八重歯をのぞかせて笑った。そのときだった。お嬢さん、と声が割り込んできた。私と勇太くんは同時に声のほうを振り返る。あらまあ、やっぱ、と眉を顰めながらぬうつと近づいてきたのは、見ず知らずのおばさんだった。

——あなたねえ、それじゃあ、死んだ子よ。

一瞬、何を言われているのか分からなかった。おばさんは私の胸を指さす。

——ほら、左前になっているでしょう。それだと、死人の装束よ。

私は呆然とした。死んだ子、という響きが遅れて胸に突き刺さる。

——お節介かもしれないけど言っておいてあげようかと思つて。あなたがこれ以上恥をかいなら可哀そうだと思つてねえ、まさかあなたが自分で着たの？ ちがう？ まあ、お母様が……

母は知らなかったのだ。和服を着るときは、向かつて右の襟が手前になるようにしなくてはならない。おばさんは、私のことを頭のてっぺんからつま先まで眺めたあと、奇妙に優しい声をつくった。

——きつとお母様は、お若いのね。こんなことも知らないなんて……

あの夜、浴衣の襟が左前になっていると言われたのは、そのときだけではなかった。

——あら、あなた、それまちがつているわよ。

——ねえ、それじゃあ、死人よ。

私を、死んだ子、と指摘したひとたちは皆、あなたのためを思つて言うのよ、と優しい声で言い添えるのを忘れなかった。

足が痛くて思つたように歩けない。ねつとりとした空気が肌に絡みついてうっとうしかった。お母さんのせいだ、お母さんのせいだ……繰り返しながらやつとのことで自宅の前まで辿り着く。顔をあげると母がペランダから顔をのぞかせていた。私を待っていたらしい。嬉しそうに手を振っている。オ・カ・エ・リ、と口で作っている。

——お母さんはお幾つ？ きつとお若いんでしょね。昔は、日本人なら、だれでも知っていたことなのよ……

私が浴衣を着たのは、あの一度きりである。花火大会の日、蒲田くんはあからさまにがつかりとしていた。なんだ、浴衣じゃないの。蒲田くんはこうも言った。

——日本人なら浴衣を着なくっちゃ。

立石さんとの最初のデートも夏だった。立石さんは、私にはかき氷を、自分は缶ビールを買った。私たちは石段に腰を下ろした。浴衣姿の女の子が幾人も横を通り抜けてゆく。胸によぎる影を追いかけて、私はおどけながら立石さんに話す。

——……それで、勇太くんとは何だか気まづくなっちゃつて。結局、なーんにもないまま卒業式を迎えて、中学が分かれてそれっきり。おばさんが邪魔しなかったら、あたしは勇太くんと付き合っていたかもしれないのに。

——はは、そりゃ災難だったね。

——だからあの夜、浴衣なんて二度と着るものかつてひそかに誓つたのよ……

何故、二年も付き合つた蒲田くんには言えなかったことを、まだ出会つてまもなくたつた立石さんに話したのだろう。笑い話にしたかった。泣くつもりなどなかった。それなのに、いつのまにか涙がはらはらとこぼれていた。

——あたしね、お母さんにむかつて怒鳴つたのよ。なんでお母さんは日本人じゃないのつて。あたしもふつうのお母さ

なが欲しかったつて。

立石さんは、うろたえもせず、呆れもせず、しゃくりあげる私の話を、ただ、聞いてくれていた。

——のんきなところもあるけれど、悪い子ではないと思うわ。佳奈ちゃん、どうかこれからも、この子をよろしくね。

立石さんのお母さんの言葉だった。

——あたしたちはね、佳奈ちゃんがお嫁さんになってくれるつてことを喜んでいるのよ。台湾人でも日本人でもどっちでもいいの。佳奈ちゃんであることが嬉しいんだから。

それは、彼女の息子が私に言ってくれたことでもあった。

「いいひとたちでよかったね」

「……ん」

うまくできた。母のギョウザと同じ形だ。そう思いながら顔をあげて驚いた。母は涙ぐんでいた。

「佳奈ちゃん、いいひとと一緒にいる。よかったね」

目尻を拭いながら、母は繰り返す。それが、右も左も分らなかった外国で私を育てあげた母の思いなのだろう。私は貫い泣きしかけるのを、ぐっと呑み込む。まだ早い。

「あたしだけ、また名前が変わるわ。今度は、ヨコからタテになるの」

母は一瞬、きょとんとした。私はいたづらっぽく笑つてみせる。

「横山佳奈から立石佳奈へ」

母は少女のように声をたてて笑った。ほら、と私はうまく包むことのできたギョウザを母に見せる。じょうずじょうず、と母が褒める。そのとき、ヒグラシの鳴き声が響いた。母の顔がほころぶ。

「呼んでいる」

「ほんとだ、呼ばれている」

私と母は顔を見あわせて笑った。もうすぐ父も帰ってくる。

〈了〉

温又柔 Wen You

80年台湾生まれ。台湾・中国・日本語の飛び交う家庭で育つ。09年「好き好来歌」でデビュー。どこにも還元できないアイデンティティの問題と向き合いながら、言葉を通じて世界が拓けていく喜びと不安を、やわらかく躍動する筆致で描く。著書に『幸福の家』（集英社）、『エッセイ』『失われた「母国語」を求めて』を白水社ウェブサイトで連載中。

旧作異聞

27



『津軽』
(新潮文庫)



斎藤美奈子
Saito Muroko

56年生。94年、『紙張小説』で評論活動を始める。古典・ベストセラー、時事問題からマンガ・アニメまで、題材の硬軟を問わず舌鋒鋭く論じる著作には、読者の物の見方をひっくり返す「目からウロコ」が満載。近著に『文芸評論』の「本の本」。

前号に続いて、太宰治ゆかりの地。今回はその本命ともいえる、太宰の生まれ故郷、青森県金木町（現・五所川原市）である。

金木町はJRとバスを乗り継いで、青森からも弘前からも一時間半ほどで行ける距離にある。この町に来た人が必ず訪れるのが、太宰治記念館「斜陽館」。太宰治（本名：津島修治）の生家である。津島家は金木町きっての旧家。一九〇七（明治四〇）年、太宰の父・津島源右衛門が建てたのがこの豪邸だった。太宰自身は「風情も何も無い、ただ大きいのである」とか何とかいっているらしいけど、とんでもない。和洋折衷、装飾過多な入母屋造りのこの家は建築道楽の賜としかいいようがなく、国の重要文化財にも指定されている。でもね、こんなのはまだ序の口で……。

あ、でも、その前に作品か。むろん読むべきは『津軽』である。一九四四（昭和一九）年、出版社から津軽風土記を依頼された太宰は、三週間ほどかけて津軽半島を回った。ときに太宰三五歳、津軽で生まれ、二〇歳まですごしながら、金木、五所川原、青森、弘前、浅虫、大鰐、それ以外は（少しも知るところが無かった）作家がはじめてつづった津軽の旅の記録である。

作品は大きく三つの部分に分かれている。前半は中学時代の友人N君と連れだって半島の東海岸を回る旅。N君は蟹田（現・外ヶ浜町）に戻って家業を継いだ中学時代の友人である。途中で加わったMさんも加えて竜飛岬を目指す旅は、さながら飲めや歌えやの弥次喜多珍道中である。

後半は一転、西海岸への旅である。津島家に婿養子に入った父の実家がある木造（現・つがる市）、恩人と叔母一家が暮らす五所川原。旧交をあたためた後は深浦や鰺ヶ沢に足を伸ばし、最後は万感の思いで西海岸最北端の港町・小泊（現・中泊町）を目指す。そこは彼の心の母、かつての子守「たけ」が暮らす町。後半は涙々のルーツを求める旅なのだ。

じゃあ生家がある金木町は？ 東海岸を回る前半と西海岸を回る後半の間に、彼は一度金木町に寄っている。中盤にあたる「津軽平野」と題された章である。ところが、笑いの前半、泣きの後半に比べるとテンション低し。生家に戻った作家はいかに居心地が悪そうなのだ。

（金木の生家では、気疲れがする。また、私は後で、こうして書くからいいないのだ。肉親を書いて、そうしてその原稿を売らなければ生きて行けないという悪い宿業を背負っている男は、神様から、そのふるさとを取りあげら

れる」など書く始末。まるでフーテンの寅である。それなりに歓待したものの長兄や兄嫁が読んだら、さぞや気分を害しただろう。

地元が作家（作品）に片思い、という例は少なくないが、太宰と金木町の生家の関係もこれに近いところがある。しかも太宰は津軽がいかにか（日本全国から見ても）に「遊」たるところがある。教科書に出てくるのは、七世紀の阿倍比羅夫の蝦夷討伐一回きり。以降の中央の歴史に津軽はほとんど関与しない。へい、いたい、その間、津軽では何をしてたのか。ただ、裾をはたいて走り直し、また裾をはたいて走り直し、二千六百年間、一歩も外へ出ないで、眼をはちくりさせていただけの事なのか？

ごもっとも。弘前城を擁する弘前、ねぶた祭で人気の青森に比べたら、津軽は歴史遺産や観光地としてのパンチに欠ける。

がしかし、事情は変わった。金木町に話を戻すと、いまここは観光バスがガンガン乗り付ける、津軽の一大観光拠点に変貌した。斜陽館もだが、真向かいの拠点施設「金木観光物産館マディニー」の力も大きい。マディニーとは英語でも仏語でもなく津軽弁の「[までに（心をこめて）]」を意味するそれで、それなんだか脱力するのだが、この物産館に足を踏み入れると、名産のリンゴや青森ヒバの土産物ともに、多彩な太宰グッズが出迎えてくれる。書籍、文具、Tシャツ、ストラップはいうに及ばず、初版本を模した箱入りクッキー「津軽」、似顔絵の焼き印を押した「治ちゃんまんじゅう」、はては「如何せんイカせんべい」に「生れて墨ませんべい」。併設の食堂の名物は「太宰らうめん」。近隣の通りの名は「メロス坂通り」。

気まじめなファンは眉をしかめるかもしれない。だけど私は思ったな。治ちゃん、あなた故郷に貢献したよ。作家（太宰治）と生家（斜陽館）と作品（『津軽』）の三つがそろわなければ、こうはいかなかったよ。っていうか、あなたのほかに津軽観光の目玉はないんだもん。

いや、そうでもないか。津軽の二つ目の観光資源、それは縄文遺跡と遮光器土偶だ。津軽は「太宰のふるさと」で、同時に「縄文のふるさと」となっている。縄文の次はいきなり太宰かい。歴史の空白は相変わらずともいえるけど、まさか太宰も自分がまんじゅうやせんべいになるとは思っていなかっただろう。死して故郷に名物を残す。作家はなべてかくありたいものである。

金原瑞人選
オールタイム・ベストYA
好評既刊6冊!

とむらう女
2刷!

希望のいる町
3刷!

私は売られてきた4刷!

ユミとワイルの10か月

シーグと拳銃と黄金の謎

ぼくの見つけた絶対値
最新刊

作品社
東京都千代田区飯田橋2-7-4/ 佃税込
TEL03(3262)9753 FAX03(3262)9757

早稲田文学 5

9月7日発売!

● 巻頭小説 このWBでも冒頭をお届け!

松田青子「スタッキング可能」

● 待望の新作詩

川上未映子「わたしの赤ちゃん」

「散文」
For Your Eyes Only
阿部和重

シリーズ【日本“現代”文学の、標的＝始まり】

§2 オオエからハルキへ

■ 海外作家はハルキをどう読み、どう書くか 日本でも評価されるタイと中国の若手作家によるトリビュート短篇
プラープダー・ユン「月の国の神と悪魔」 田原「いるかホテル」

■ 海外のムラカミハルキ
辛島デイヴィッド・河野至恩

■ オオエについて考えつづける
大杉重男・石川義正

§2.5 翻訳という未来

■ 連載4作開始!! 蘭・露・米・仏の巨匠による長篇翻訳
セース・ノーテボーム「儀式」 松永美穂 訳・解説
タチヤーナ・トルスタヤ「クイシ」 貝澤哉・高柳聡子 訳・解説
ドン・デリーロ「ホワイトノイズ」 都甲幸治 訳・解説
アラン・ロブ＝グリエ「もどってきた鏡」 芳川泰久 訳・解説

■ 座談会 十二人の優しい翻訳家たち

グローバルに移動する小説を追いかけて

泉京鹿(蘭) + 堤康德(露) + 辛島デイヴィッド(米) + 貝澤哉(仏) +
武田千香(露) + 都甲幸治(米) + 岩本正恵(露語) + 青山南(露) +
きむふな(蘭) + 柳原孝敦(露語) + 松永美穂(ドイツ) + 芳川泰久(露)

■ エッセイ 世界を駆ける漫画家がガチで語る ■ 『青い脂』単行本刊行記念トーク
ヤマザキマリ「ガルシア＝マルケス偏愛」 望月哲男(ほか)「リップス! リプス! リプス!」

この作家は
どの国に分類するの?

多言語で書かれた小説は
どう訳しているの?

いま世界文学は
どんな状況にあるの?

第24回早稲田文学新人賞受賞作

黒田夏子
「abさんご」

各紙(日経・読売・東京・時事)で話題
75歳の新人作家誕生!

選考委員 蓮實重彦

“誰もが親しんでいる書き方とはいくぶん異なっているというだけの理由でこれを読まずにすごせば、人は生きていることの意味の大半を見失いかねない”

定価●1500円(税込)／発行・発売●早稲田文学会

ISBN: 978-4-948717-06-0／A5判420頁



※画像はイメージです。

9月7日発売「早稲田文学⑤」イチオシ！
注目の新人小説家渾身の問題作

スタッキング可能

松田青子

① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮

「あなた、先ほどから私たちが今いる給湯室の、社員たちが各持ち寄ったカップをてんでに置いている流しの横のスペースを落着きなざげに見つめてらっしゃるようにお見受けしましたが、そこに何があるというんですか？」

「な、なんのことやらさっぱりわからん」

「これは失礼。質問が悪かったようですね。あなたにとってあるべきはずのものがない、つまり、一体全体そこから何がなくなっているというんですか？」

「お、おまえ、おまえ、なにを知っているというんだ」

「あなたのお探しのものではたら、流しの上の引き戸の下の段にある「飲みたければ飲めばいいじゃない」と油性ボールペンで書かれた共有のミロの袋の後ろにありますよ」

「なにを！」

「ほらほら、なにも飛びつくことはないじゃないですか。逃げませんって。あなたの探しているこのタンブラーは逃げません。ほう、かぼちゃ柄ですか。おや、ここにほうきに乗った魔女もいる。どうやらハロウィン限定商品ですな。推理するまでもないことですがね」

「貴様。ミロの後ろにあるといい、私を飛びつかせておきながら自分のマントの下からタンブラーを出すとはなんと卑劣な。くそ、そのタンブラーを私に渡せ！」

「おっと、そうはいきません。このタンブラーにはある重大な秘密、つまり証拠が隠されているのですから」

「ふん、どういふことだかさっぱりわからん」

「あくまでもしらを切るおつもりですよ。いいでしょう。いいですか、このタンブラーに毒を混入させ、ボビーさんを殺害することができたのはあなただけなんです」

「くそ、おまえ、どこまで、どこまで知ってるんだ！」

① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮

「D田だろ。やっぱお前もそう思ってたか。俺も絶対そうだと思ってたんだよ」

A田は我が意を得たりとばかりに、自分のジョッキをB田のジョッキにごとんと当てた。ハイファイブのかわりだ。

「ああ、一瞬だまされるところだったが、俺の目はごまかされない。しかも今のお前の言葉を聞いてさらに確信したよ」

B田は最後の言葉を放って息をつく間もなくビールをおおととジョッキを空にし、そのまま「おかわり」とこの店でA田ランキング三位の店員に声をかける。A田によると、顔はそんなにかわいくないが、愛想がいい、笑顔がいい、というこらししい。B田の真っ赤に染まった首をほればれと眺めながら、A田は枝豆を口に入れる。塩加減がちょうどいい。

「で、どこでそう思ったんだよ」A田はテーブルにひじをかける、体を乗り出す。ついでにネクタイをもう少し緩めた。B田と同じく赤い首もとが露になる。目も赤い。

「いやなに、簡単なことだよ。俺がトイレから出てきたときにちょうどD田が給湯室で、ほらあのスターバックスで売ってるタンブラーとかいうやつにお湯を注いでいるところだったからさ、声をかけてやったんだよ。新しい職場にはもう慣れましたからね。そしたらD田のやつ、ポットのボタンを押すのをやめせず、横目で、あっぱい、どうもありがとうございます、だぜ。せっかくこつちが会話の入りの口つくってやったっていうのに、入ってきもしない。そのままこつちも見ずにタンブラーの蓋ぐりぐり閉めてやがった。まったく無礼なやつだぜ」

「げっ、そりやもう完全に決定だな。典型的なレズビアン症例だ。実は俺も何度か会話を試みたんだけどな、D田の野郎、毎回にこりともしない。なんか固いんだな。髪も短いし。あとお前気付いてたか？ あいつがスカート履いてるところ見たことないだろ？ 俺たちに興味がないんだよ」

「ああ、真正正銘のレズビアンだな。けっ。せっかく新しい女が職場に入ったと思ったら、またレズビアンだなんてがつかりだよな」

A田B田は明太子のだし巻きたまごをつつきながら、それぞれ心の中にあるレズビアンリストにD田の名前をしたためた。A田の心のノートはコクヨの学習ノートでペンもその時々をそらへんにある百円のボールペンとかシャーペンとかなんだつたら鉛筆でもいいという感じだが、文房具マニアのB田はモレスキン製のノートにウォーターマンの万年筆でしっかりとD田と書き込んだはずだ。

今夜は待ちに待ったレズビアン会議の日だ。

会議といっても、有効な解決策を論じるわけではなく、いや、論じられるものなら論じたいところだろうが、論じようがないから論じないわけだが、とにかく自分たちが生活している上でレズビアン達に受けた不当な仕打ちを報告し、ストレスを発散している。

月に一度のお楽しみ、と語呂よくいいたいところだが、実際は月に二度開催されている。理由は明白だ。レズビアンどもが増え続けているからだ。理由は理解できないが、やつらは流行の病のように増殖の傾向にある。いや、理由はあれだな、社会の流れっ

話題の映画原作 絶賛上映中

出演・神木隆之介/橋本 愛/大後寿々花ほか 監督・吉田大八



©2012「桐島」映画部 ©朝井リョウ/集英社

桐島、部活 やめるってよ

早稲田大学
文化構想学部

叶わぬ恋心、未来への不安や迷い…
著者が19歳で描いた青春オムニバス！
第22回小説すばる新人賞受賞作



●定価500円(税込)

16万部
突破!

好評発売中

35th Anniversary 集英社文庫

バレー部の主将・桐島が突然部活をやめた。それを機に、周囲の男女5人に波紋が広がり…。揺れる17歳の心を映し出す群像小説。

てやつだな、まったく忌々しい。これでは月に一度の報告会では身が持たない。A田B田は月に二度会議を設けることにした。

A田B田は顔を突き合わせ、つばを飛ばし、語り合う。お互いのつばが空気で混ざり合う。

職場のレズビアン。これが最も頻繁に議題にあがった。年がら年中同じ場所にいるのに少しもA田B田たちに興味を見せないレズビアン。愛想はいいし結構かわいいしA田B田たちとしてもまんざらじゃないのに、まったくまんざらじゃないのに、決して誘ってこない女。これも結局レズビアン。バレンタインデーにチョココレートをくれないレズビアン。義理チョコでも構わないのに、くれたというその気持ちだけで好評価なのに、死んでもくれないレズビアン。街角のレズビアン。電車内のレズビアン。コンビニのレズビアン。角を曲がると向こうからレズビアン。

レズビアンはどこにでもいた。生活圏内レズビアンだらけだった。

なかでもコンパに混ざっているレズビアンは許しがたかった。A田B田たちの顔を見て、あからさまにつまらなさそうな顔をしたまま、顔を寄せ小さな声で何やらこそこそ話しているレズビアン。

ン同盟。男に興味がないならコンパになんて来るな。A田B田はレズビアンを呪った。口汚くのしつた。レズビアンにはイライラさせられる。はらわたが煮え繰り返る。レズビアンは俺たちの生活に喜びを与えない。楽しみをくれない。彩りを添えない。

目の前に本来ならカウンターの奥にいるはずの店長の手によって刺身の盛り合わせが置かれた。気がつく、店内はいつの間にか満席になっている。人手が足りないらしい。

「俺たちにはCちゃんだけだな」

「ああ、Cちゃんはいいな」

「天然っていうか、天真爛漫っていうか。しゃべると心が洗われるよな」

「この世の女が一人残らずCちゃんみたいだったら最高ののに」

「ああ、まったく、Cちゃんみたいだったらな。俺たち、この抑圧された日々から解放されるつてのに」

A田はふわふわの茶色の髪をして、ふわふわのスカートのCちゃんを思い描いた。

用事があってデスクに行くと、用事なんてなくても行くが、その度にそつとお菓子をくれるCちゃん。アメちゃんどうぞなんて

言いながら。かわいい、愛らしいCちゃん。

A田は鯛の白濁した目をぐりぐりとえぐると、ぽんつと口に含んだ。乾き始めた刺身数切れに飾りの菊の花がべったり寄り添っている。この菊の花の方がレズビアンよりもよっぽどいい仕事してるぜ。

「お料理がラストオーダーの時間ですけど、何か追加されますか？」降って湧いたようにいつの間にか店内にいたA田ランキング一位の店員が声をかけてきた。今日も総合的にダントツのかわいさだ。A田B田はジョッキを高々と上げると声を揃えて宣言した。

「とりあえずもう一杯」

このつづきは「早稲田文学⑤」で！

松田 青子 Matsuda Aoko

79年兵庫県生。福永信・長嶋有らの同人誌「イルクーツク」で発表した「ジャンプ・アンドリンズ」から、その奔放でリズムミカルな文体とスパイスの効いた物語で「一気に読者を惹きつける。主な作品に『ウォーターブルーフッド』、『早稲田文学増刊U30』、『もろくろ結する女』（早稲田文学増刊U30）、『スリッパ』（すばる 2010年9月号）、『マリーガレットは植える』（早稲田文学増刊 震災とフィクションの『距離』）など。

追いかけて 迷声新聞

故G藤M生氏の新作、 阿久太川賞を逃す！

13年ぶりの新刊なるも

第一四八回阿久太川賞の選考会が十七日、東京・築地の料亭「新々喜楽」で開かれ、故人としては初の阿久太川賞作家となるかが注目されたG藤M生さん(一九三二〜一九九)は受賞を逃した。候補作『この人を見よ』は、九〇年一月から九三年四月まで文芸誌「K燕」(F武書店/九六年一月号をもって廃刊)に連載された未完長篇で、谷崎潤一郎作『鍵』に関わる人物たちの対話から、日本近代文学が抱える問題に切り込んでゆく。一二年七月にG戯書房から刊行され、「G藤M生氏一三年ぶりの新作」として話題になっていた。

五度目の候補

G藤さんは生前に四度阿久太

川賞候補となっており、今回は五度目の候補だった。選考委員の一人は「落選は残念の一言。G藤氏の遺稿から未発表の中篇小説が発見された」と聞いているので、次回に期待したい」と述べた。

G藤さんは自らの没後に文学賞を受賞した場合について、副賞の賞金及び受賞作の印税は全

新人作家宅に不審な手紙 文藝家協会への勧誘か

作家・Iとつという氏がデビュー直後に、見知らぬ人物から不審な手紙を受け取っていたことがわかった。去る二〇〇九年一月に作家のO泉光氏との文

怪しい眠りに ハイナール

芸漫談で語ったもの。同漫談を収録した「Sぼる」同年五月号(S英社)によれば、Iとつ氏が一九八八年に処女作を発表した際、面識のない精神

ゴーストライター アヒダ

業務上秘密のワイルド・パティの潜入取材。眠ったふりが巧みで、いかなる権威にも順応しない。高度で、ナンセンスで、反抗的なパロディ精神の持ち主を望む。九州男児であればなおよし。「笑い地獄」書本

なす風潮に異議を唱えていた。

団地の作家

G藤さんの影響を受けて小説を書くようになったと自称する作家のS川M晴さん(47)は、「私にとってM生さんは団地の作家。妻子持ちの身でありながら、家庭の幸福に安住できず、かといって自暴自棄にもならず、右往左往する『何?』や『書かれな報告』こそが真骨頂だと思っています。今回の候補で話題になったのを機に、G藤M生の小説が一冊でも多く復刊されることを願っています」と語った。

(記者・佐川光晴)

福永 信

西野は北村に弱味を握られていると思っている。『関係』 後藤明生

『関係』(昭四六)所収。実質的なレビュー作。引用はその冒頭。何の変哲もない文章のようだが、そこが妙だ。その後、続く女性の一人称が余計に印象を複雑にする。物語は意外にも男女関係の外に出ない。したがって登場人物も限定されるが、異様に反復される人物名が眩暈を誘う。終いには陰謀の匂いまで立ち込める。はたして冗談なのか本気なのか。明生は終生、このような独自路線で摩訶不思議な境界線を引き続けた。

この人を見よ



十一月某日(金) 東京
今日は東京駅で、ちょっとした事件が起きた。「ひかり」を降りて、地下ホーム行きの下りエスカレーターに乗った。ここまでは、いつもの通りである。

ただ今日は、いつもより少し早く着いた。いつもは新大阪十九時四十分発(東京二十二時四十分着)の「ひかり」か、遅いときは二十時三十分発(東京二十二時四十分着)の「ひかり」である。どちらも新大阪始発で、二階建てグリーン車つきの、いわゆる「ニュー新幹線」であるが、今日は新大阪十七時四十八分発に乗った。これも始発の「ニュー新幹線」で、二十時五十二分東京着である。

早く帰って来たのは、特に用事があったからではない。六時からの仕事の予定が取り止めに、たまたま体が空いた。仕事といっても、スポンサーとの酒のつき合いである。つまり、先方のご都合で、とつぜん予定が変更になった。さあ、どうするか。トゥ・ビー・オア・ノット・トゥ・ビー、ザット・イズ・サ・クエスチョン。ここでミジメになるか、ならないか。そこがサラ

夏休み 読書感想文 コンクール

主催・追いかけて迷声新聞社
後援・早稲田文学



課題図書

- ▽「この人を見よ」 後藤明生
- ▽「狭き眼」 後藤明生
- ▽「何?」 後藤明生
- ▽「書かれな報告」 後藤明生
- ▽「四十歳のオブローモフ」 後藤明生

※このコンクールは、各発行元および著者とは関係ありません。

部門

- ①心が小学生 ②心が中学生
- ③高齢者(前期・後期)

規定

主催者が指定した課題図書を読んだ感想文

長さ

- ▽小学生 四〇〇字詰め原稿用紙二枚以内
- ▽中学生 一枚以内
- ▽高齢者 〇・五枚以内

応募方法

作品に学校名、学年、氏名(ふりがな、性別)を明記して、二〇二二年九月三十一日着で、

〒一六九〇〇五一

東京都新宿区西早稲田一〇九一二

早稲田文学「追いかけて迷声新聞読書感想文コンクール係」まで郵送ください。

発表 随時(予定)

漫画家チームに16対11

である。矛盾だらけである。『分別ざかりの無分別』とのこと。「矛盾しているのが当たり前じゃないか」という問題はむしろ、その矛盾をどこまで追求できるかだ」と胸を張る後藤さんの新刊『この人を見よ』も、没後三年後に上梓されることも含め、確かに矛盾だらけの一冊だ。(記者・市川真人)

方も多いと思うが、16対11でわたしたちが負けた。

漫画家の間では、ずいぶん草野球がさかんらしい。集まった面々、それぞれ違ったユニホームを着ていたが、それだけチームがあるということだろう。その点、小説家だけのチームは、キンクコングスのみらしい。わがチームは、最初は野球よりは酒で集まった飲み仲間で、過去六年間の戦績は七戦して六敗一分けである。

しかし、村上龍や高橋三千綱

といった新鋭が加わって来て少々雰囲気が変わって来た。何とか一勝を、ということであるが、わたしとしては、もう一つ小説家だけのチームが出来たら面白いと思う。また、批評家チームともやってみたい気がする。それからもう一つは、何とか眼を引く込めること。六年前に作ったユニホームのスポンが、とうとうはなくなってしまうのである。(後藤明生「草野球チーム」より。初出・「週刊小説」)

一九七六年二月(二七号)

リーマンの思案のところでゴザル。
私は反射的に時刻表を取り出して、時計を見くらべた。エゴノミーきつぷ売場でもらった新幹線専用のミニ時刻表で、いまではそれを常携帯している。私は時刻表を開き、よし、いまなら十七時四十八分始発の「ニュー新幹線」に間に合うと判断して会社とび出し、実際、間に合った。そして、そのことに満足した。いつもより早く着いたのは、ただそれだけの理由からであるが、この満足は決して小さなものではない。これで、とつぜん予定を変更したスポンサーを怒ますに済む。サラリーマンの精神衛生上、これに優る良薬はないのである。

下りのエスカレーターに乗って間もなく私は、おや、と思った。右隣の上りエスカレーターに、K氏が乗っているのを見つけたのである。おや、おや、これは珍しい。K氏は新聞記者であるが、仕事上のつき合いではない。彼は同じマンシヨンの隣人だった。私は九階、彼は十一階の住人で、お互い同じエレベーターを使用している。

(福武書店「海燕」九〇年一月号より)

幻戯書房の本

つぎはこちらで

この人を見よ

発売中!!

◎四六判◎上製
◎定価 3,990円 (税込)

信永福

たのづの

『疑問符で終る話』(昭四八) 所収。身も蓋もないの書き方が真骨頂である。右引用の会議とは、本作の大半を占めるある事件に絡み臨時会議のことである。だが真剣な議論に水子守者が後を絶たない。語り手自らが率先し、脱線するのでから始末に悪い。「政治の季節」の終場を早速早く作品化した高感度な編であるが、新しい時代はその後、始まったといえるのだろうか？


住友社 〒105-8070 東京都港区海岸1-15-1 www.fujishima.co.jp



図書館横断検索サイト「カーリル」のレシピ機能。好きな本を集めてレシピをつくり、いろんな人に届けることができます。ここでは、そのなかからWB編集部クボキがピックアップ！



『色の名前』『空の名前』
数ある色の名前を写真と
ともに楽しむ。人気写真
集シリーズの2冊。

あなたの
知らない
モノの名前



『日本の髪型』
伝統の美 櫛まつり作品集』
高島田、丸髷…日本髪を文化を遺
す一冊。写真と文章による解説付。



『和漢三才図会』
寺島良安
人間、土地、妖怪、植物などに分け
られた、江戸時代の辞書。解説付。

知りたがりにおススメ

本物の空色をご存知ですか？ 空色の定義は「ロンドン郊
外の善く晴れた日の空を30センチの紙筒から覗いたときの色」。
知ってるようで知らなかったり、なんとなく見逃してきた言葉
や名前を見なおしてみませんか？
素朴な疑問に答え、心躍る発見をさせてくれる本のレシピです。

なぼさん

このレシピのURL
<http://calil.jp/recipe/12762067>

一介の本好き、図書館好きです。



『ドロップアウトのえらいひと』
森永博志
かつてヤンチャだったアーティストや
企業家がたくさん登場。



『独学という道もある』
柳川範之
海外暮らしを続けて高校へは行か
ず。現在、大学の教授。



『15歳の寺子屋
「フラフラ」のすすめ』益川敏英
一応、学校は行ったけれど宿題なんて
全くしなかった。でもノーベル賞。

高校生におススメ

学校に行くのが辛い「マジメ」な高校生へ。
学校って、行くのがツツ。でも、なんで行かなくちゃいけ
ないだろう。そもそもツツってなんだろう。高校は義務教育
じゃないんだし、辞めたって問題ない。でも…。
いろんな生き方ができることを知っておいてほしい。

なかむさん

このレシピのURL
<http://calil.jp/recipe/4838344>

中学／高校で司書しています。

学校なんて
行かなくて
よい

空色の定義には、「ニューヨークから50マイル以内の上空を、厚紙にあ
けた直径1インチの穴から約30センチ離れて覗いたときの色」というのも
あるみたい。

髪型の本は、江戸時代の髷だけでなく、古墳時代のハニワと照らし合
わせたものもあるんだって！ 海の向こうにはお船を頭に乗せた人もいた
みたいけど、こちらみたいへん。辞書の「妖怪」の項で調べてみたら載ってな
かったよ。

人も物も、呼ぶときには名前が必要だね。同じに見えるものでも、じつ
はどれも違うもの。今の名前と一っしょに、昔の名前を知るのめったにしくな
い？ 覚えるのたいへんだけど、たくさん知りたいな。

「カーリル・レシピ」で本を紹介してくれる人、大募集！

レシピは3ステップで作ります。①オススメしたい人とタイトルを決めて、②本を3冊以
上選び、③思い入れを書き込みます！ 準備ができたらはじめましょう。

カーリル・レシピ URL <http://calil.jp/recipe>

「ウチのオススメ（レシピ版）」では毎回、書かれたレシピの中から2つを選び、ご許
可をいただいた上で紹介させていただきます。

高校生だけでなく、いろんな人に知ってほしいレシピですよ。いっし
よに、漫画家の西原理恵子さんの言葉を読んでほしいな。学校の外にも勉
強する場所はいくつもある。何より自分でお金を稼いで自由を手に入れられ
る16歳まで生きてほしい、「その先に『ああ、生きてよかった』と思える
社会が必ず待っています」って。いじめについて書いた文章だけど、いろん
な理由で「学校、行きたくない」という人の背中を押してくれると思うから。
「《いじめられている君へ》西原理恵子さん」（朝日新聞 2012年8月4日
<http://www.asahi.com/national/update/0804/TKY201208040635.html>)

本を借りるならカーリルで！ <http://calil.jp/>

今日のカーリル

11月20日～22日まで図書館総合展に出展！
カーリルのブースに遊びに来てね♪

Waseda Bungaku Free Paper
WB vol.26

2012年9月1日発行（年4回刊）

Published by 浦野正樹

Edited by 芳川泰久 (Editor in Chief)

横山絢音 青山南
関口拓也 貝澤哉
大内啓輔 十重田裕一
鶴岡眞屋子 三田誠広
家永楓 山本浩司
桃原賢一郎
山本浩貴

窪木竜也 朴文順
禹丞美 市川真人
(Concept & Direction)

Design 奥定泰之
Photograph 篠山紀信 p01
Hair Make 吉岡末江子 p01
Special thanks to 山本恵美子 山崎貴之
青木誠也 布施洋子
吉本龍司 杉山和世

編集・発行 早稲田文学会／早稲田文学編集室
169-0051 東京都新宿区西早稲田 1-9-12
小池第一ビル 203
TEL/FAX 03-3200-7960
<http://www.bungaku.net/wasebun/>

印刷 凸版印刷株式会社
112-8531 東京都文京区水道 1-3-3
TEL 03-5840-4845 FAX 03-5840-1676
<http://www.toppa.co.jp/>

▼WB夏号をお届けします。巻頭小説は温又柔
さん。今、世界の文学を見渡すと、「国民国家
文学」の枠を逸脱する、多言語で書かれた小
説が主流になりつつありますが、温さんもそ
の内のひとり。アイデンティティの問題に向
き合う、跳ねるような明るさの文章を味わ
ってください。▽1年ぶりのナンパリング・タイ

トル「早稲田文学⑤」も発売。タイと中国の
若手作家の書き下ろし短編、翻訳連載4作開
始、12人の翻訳家による座談会と、日本×多
言語のネットワーク上で小説を考える企画が
揃ってきました。ぜひご覧ください。(K)
▼後藤明生氏の逝去から13年、驚くほどの時
間を経て「新刊」単行本が刊行されました。
あまり嬉しかったので、佐川光晴・福永信
ほか後藤好きの書き手を誘って勝手に応援企
画を立ち上げました。幻戯書房刊『この人を見
よ、3990円の価値は十分。▽厚い単行本が
もう一冊。『早稲田文学』本誌で翻訳連載さ
れたワラジミル・ソローキン『青い顔』（青
顔）を改題）が河出書房新社から本になりま
した。連載中も読むひとと読むひとを次々巻
込んでいった超話題作。初めて触れるひとと
「リプス！」の魅力がご堪能あれ。▼↑でKく
んも書いていますが、震災増刊を挟んで久々
の本誌も刊行。前号開始の連続特集も全貌が
見え始めるはず。期待急上昇・松田青子の力
作や、川上未映子待望の新作詩、75歳の新人・
黒田夏子の受賞作がいよいよ全篇掲載、など
盛り沢山。予備1500円はお買い得!! (ic).
▼今号は、円城塔「算数」、八代嘉美「生物」、
望月旬々「給食」がお休みです。

これから、俺たち、
どうすりゃいいんだ。
そうだ、ベルクへ行こう

生ビール ¥315 コーヒー ¥210

Beer & Cafe
BERG

☎ 03-3226-1288

<http://www.berg.jp>

↑ベルク通信、全バックナンバーが
ご覧になれます。

JR新宿駅東口改札出てすぐ
(ルミネエストB1)

WB常設。コーヒーのお供に。

《社会》の思考

大澤 真幸

Ohsawa Masachi



『(自由)の条件』や『ナショナリズムの由来』など、社会構造の観察と本源的理性への思考を総合する思考を繰り出し続ける社会学者であり思想家。同時にスポーツや文学の批評も手がけるなど、フィールドを横断した活躍をみせている。毎月多彩なゲストを迎える月刊個人誌『THINKING O』を左右社より刊行中。

第5回 言語哲学の地平から〈未来の他者〉を見る

原発事故や環境問題は、緊急の問題を提起している。われわれは——現在のわれわれは——〈未来の他者〉といかにして連帯しうなのか？ これは不可能な難題に思える。〈未来の他者〉は、定義上、ここにはいないからだ。存在しない〈他者〉とどうやって連帯することができようか？ だが、私はあえて言いたい。〈未来の他者〉は、われわれとともにいるのだ、と。

芸術史の領域では、しばしば次のような現象が指摘されている。後の観点から遡及的に見返すと、過去の芸術の形式が既に、未来の芸術の形式を先取りしているように見える、ということがあるのだ。たとえば、19世紀の優れた小説には、20世紀になって初めて真に技術的に可能になる映画的手法が用いられている。エミリー・ブロンテによる描写が、入り組んだ「フラッシュバック」の技法を彷彿とさせ、ディケンズの書き方には、「クロス・カッティング」や「クロース・アップ」を連想させるものがある、と。

フランスの文芸批評家ピエール・バイヤールは『予感による剽窃』（2009）というおしゃれな本を書いている。この本の中で、過去の作品が、それより後の未来の作品を剽窃しているように見える事例が、たくさん挙げられている。ヴォルテールのいくつかの断片は、彼よりも200年も後の（コナン・ドイルが創作した）シャーロック・ホームズの演繹的推論を盗んでいる。あるいは19世紀の小説家モーパッサンのあまりよく知られていないある小説は、20世紀に書かれたブルーストのあの有名な箇所、日常のちょっとした物との偶然の出会いが膨大な記憶の噴出の引き金を引くという部分の剽窃である……等々。

過去の作家が、まるでタイムマシンに乗って未来に行ってきたかのようにして、後の作品を剽窃したり、先取りしたりしている、などという発想は、一種のお遊びに思われるかもしれない。しかし、こう言いたくなる現象は確かにある。とすれば、この現象をまじめに受け取らなくてはならない。しかし、どのような意味で？

まず、未来の剽窃、未来の先取りとも呼ぶべきものは、未来に属する視点、事後の視点からしか見出せないことが重要だ。ディケンズの小説に、19世紀の文学的文脈には還元できない要素があったということは、物語映画が登場した後でなくては発見されないのだ。その当時の人々には、それは気づかれない。したがって、それは、フランス語で言うところの前未来形（未来完了形）で存在している。未来から見たときに「すでに存在していた」と言われるような形式で、である。

したがって、ここには三種類の作品がある。(X) 19世紀の文化的コンテクストにはまっているディケンズのももとの小説。(Y) 20世紀の物語映画の集合。(Z) 映画的なディケンズ。ここでZはYの先取りであり、Yの代理人のようなものである。ここで、XとZの関係を見るとよい。確かに、Yの方は、Xにとって未だ存在していない。しかしZは、Xと一緒に（同時に）存在している〈未来の他者〉である。Zは、Xと同じ「現在（19世紀）」を共有しているのに、「未来」に属しているのだ。

しかし、当然、次のように反論されるだろう。これは、映画の技法

の発達によって、単に、われわれのディケンズに対する見方が変わった、ということではないか。Zは、Yから見たときに現れる遠近法的錯覚の産物ではないか。つまりZは、Yからの投影によって存在しているように見えるだけで、それがXにとって実在している、というのは言い過ぎではないか。こうした反論がありうる。

しかし、Zは錯覚の産物ではなく、実在している。そう考えるべき根拠を、意外なところからもってこよう。それは、言語哲学者ソール・クリプキが提起した信念報告についてのパズルである。

日本語しか使えない太郎（X）は、エンゲルスがイギリスの労働者階級について書いた本（邦訳）を読んで、「イギリスは汚い国だ」と思うようになった。ここからわれわれ（Y）は、「太郎はイギリスを汚い国だと信じている」（①）と報告しなくてはならない。やがて、太郎は、イギリスに移住して、自分が住んでいるその国が大好きになった。彼は、その地で、英語を、日本語からの翻訳によらずに直接に学習した。彼は、自分が住んでいる国が“England”と呼ばれていることを知るが、そこそ、イギリス」という名で彼がかつて指示していた場所であることを知らない。太郎（Z）は、いつも、英語でこう叫んでいる。“England is pretty!”と。すると、今度は、われわれ（Y）は、「太郎はイギリスをきれいな国だと信じている」（②）と言うほかない。①と②は両立しない。これをどう考えればよいのか。

これは、実にやっかいなパラドクスである。このことを納得するためには、固有名についてのいささか込み入った哲学的議論を理解する必要があるのだが、ここではその解説は省略せざるをえない。ただ、これが言語哲学的には解けないほんもののパラドクスであることを前提にして欲しい。

言うまでもなく、この例のX太郎もZ太郎も実在していて、われわれYから見た錯覚でも仮象でもない。このパラドクスを解く方法は、私の考えではひとつしかない。XとZが同一人物であると同時に互いに他者である（絶対矛盾的自己同一！）と見なすこと、これである。ただし、XとZの間のこの矛盾は、太郎自身には決して見えない。だから、太郎が多重（二重）人格者になったりはしない。この矛盾を見ることができるとは、信念報告者である「われわれY」のみである。われわれYにそれができるのは、われわれYが「イギリス→England」という移行（翻訳）の関係を見通しうる立場にいるからである。

今や、クリプキのパラドクスとディケンズの例との間の類比関係は明らかであろう。一人であると同時に二人であるような太郎が実在の人物であるとすれば、Xディケンズだけではなく、Zディケンズも実在的である。先に述べたように、XにとってZは〈未来の他者〉である。〈未来の他者〉は、現在のわれわれにとって、われわれ自身でもあるような〈他者〉という形式で、同時代的に共存しているのだ。とするならば、われわれは、〈未来の他者〉と関係をもったり、彼らと連帯したりすることも可能なはずだ。〈未来の他者〉は、ここに、われわれの〈現在〉の内にいるのだから。♫



みんなの楽しい合言葉
青い脂
ウラジーミル・ソローキン
望月哲男・松下隆志 訳

「早稲田文学」で連載中から話題騒然。
現代ロシアの怪物作家によるSF巨編。
ついに発売!!

極秘プロジェクトを進める未来のロシア。目的は、永久エネルギーに関わるとされる「青い脂」の獲得。ドストエフスキーら作家のクローンから得られるという青い脂はやがて、ヒトラーとスターリンが支配するもう一つの世界へと送り込まれ…

河出書房新社 ISBN: 978-4-309-20601-1

四六変型・並製396ページ 定価：本体3675円（税込）

キョウの料理 3

立原正秋のインスタントラーメン

……私が自分で庖丁を握ってみようと思ったのは、うまいものを食べたい一心からであった。また、幼時から異常に発達した味覚・嗅覚が、庖丁を握らせたとも言えよう。……

世阿弥の『風姿花伝』につぎの言葉がある。

よき、悪しきとは、何をもて定むべきや。たゞ、時によりにて、用足るものをばよきものとし、用足らぬを悪しきものとす。

うまいものをつくる、食べるのも、これと同じである。用足らぬ見捨てられたものでも、ときによっては見事に用足る材料となるものである。

われわれは、味噌汁の身といったら、豆腐かわかめ、あるいは里いも、菜っ葉しか考えつかない。かりに、西洋野菜として普及してきたピーマンを千六本に刻んで入れて見たまえ。ピーマンの香が味噌の味と微妙に溶けあっているのがあじわるるだろう。……

(立原正秋「わたしの庖丁書」)

という具合にえんえんと上からものを言うかんじで続いているいく氏の食べものにまつわるエッセイ。有名料理店をこきおろし、無煙ロースターで魚を焼く主婦は脳細胞が足りないとはやき、このひとはいったいなににこんなに怒っているの？ そんなに腕がたつの？

立原正秋は第七次「早稲田文学」の編集人でもあります。当時の編集後記を読んでもたいいていいつも怒っていました、食べものにかんしてこんな文章もありました。

【材料】
インスタントラーメン、鶏がら、生姜、昆布、帆立、海老、アスパラ、わかめ、ねぎ、海苔、バター、塩、こしょう。
「つくりかた」

鶏がらはいちど湯通しします。湯を沸かし、鶏がらとねぎの青い部分、生姜を加えてアクをていねいにとりながら一時間ほど煮込みます。昆布は水にしばらくつけておき、火にかけ沸騰する直前に取り出してだしをとります。海老とアスパラはさつと湯通しし、わかめを戻し、ねぎは小口切りにしておきます。フライパンでバターを熱し、帆立とアスパラを炒めて塩こしょうで味付けます。あとはインスタントラーメンの袋にあるつくり方で水のかわりに鶏がらスープと昆布だしを二・一くらいの割合でつかってください。彩りよく具を盛り付けてできあがり。

……「昨年「早稲田文学」の編集をやっていたころ、私は手伝ってくれる学生達によくこの大船の鰯の押しずしを買って行った。しまいには学生達が、きょうは編集長がくる日だから鰯の押しずしを食いに行こう、と用もないのに編集室に来るので、馬鹿野郎、とどなりつけることがあるが、この押しずしは自分の家で簡単に出来る。……(食べものの話)」

さて。本を読んでいたらお腹が空いてきました。ちょっと小腹が空いたなというときには手軽くインスタントラーメンをつくりまします。

具はねぎとたまごでもあればじゅうぶんという程度ですが、もし、小腹が空いている主体が立原正秋だった場合……。

インスタントラーメンをつかう時点で「脳細胞が足りない」と言われてしまいそうですが、そう、まずはスープをとるところから始めねばならないでしょう。

このレシピどおりにつくるのは、正直バカバカしいんですが、インスタントラーメンを食べるときには、冷蔵庫に余っている野菜くらいは刻んで入れて見たまえ。



キョウ ミナワ

Kyo Minawa

カフェやバーで経験を積み重ね、料理のみならず、小説エッセイも手がける料理人。身近な食材をつかった、気どらないのにお洒落なレシピに魅了される女子多し。その毒舌は、効きすぎるスパイスとして、一部に中毒者がいるのだとか。

Final Dragon Library World 8

ファイナルドラゴンライブラリー

ぼくは勇者に向いてない『姑獲鳥の夏』編

塔の上から少女が飛び降りた。それを追うようにして、ぼくも飛び降りた。だいじょうぶだ、助かる。

ぼくは、なかば麻痺したような頭で考えていた。

ミノタウロスに襲われたり、本を読むと時間が止まる世界だ。なんでも、ありじゃないか。

だから、肩甲骨から翼が生えてくるイメージを強くクリアに持てば、それが実現する、そう信じていた。

「ツバサっ！」

叫んだ。

「出てこい、ツバサっ!!!」

白い少女は、そのまま落下していく。地面に向かって。ぼくの背中から翼が生えてくることも、ない。

どうして、イメージ通りにならない。いままでデタラメなことが幾度も起こったじゃないか。

このままでは、少女は地面に激突して死んでしまう。

起こってしまったことは変えられない。ふと、他人の思考が入り込んで来たように考えてしまう。起こってしまったことは変えられない。

何が？ 何が起こってしまった？ どういう意味だ？ もうすでに気づいてしまっているのだけど、それがうまく理解できないようなじれったい感覚。

いや、それどころじゃない。

あと数秒で、彼女は地面に叩きつけられてしまう！ どうにかしなければ！

手に本が握られている。とにかく、この本を読もう。読んでいる間は時間が止まるはずだ。読み終わってしまうと再び時間は動き出すのだから、何の解決にもならないかもしれないが、とにかく。

本のタイトルは『^{うぶめ}姑獲鳥の夏』。古本屋にして陰陽師である京極堂、文士である関口巽、特殊能力を持つ探偵である榎津礼二郎たちが活躍するミステリー小説だ。

二十箇月も身籠もったままの娘。さらに、夫は密室から失踪したという。

不可解な謎に、「憑物筋の呪い」だとか、「ナチスの研究所で秘密の薬を開発していた」とか、奇怪な噂が渦巻く。

陰陽師である京極堂が事件を解決するのだが、不思議なパワーで妖怪を退治する話ではない。

文庫本で600ページを超える分厚いこの小説は、関口と京極堂の対話から始まる。最初の章（100ペー

米光一成 Yonemitsu Kazunari

64年生。名作落ちゲー「ぶよぶよ」はじめ多数のゲームをつくるほか、小説をゲーム化しようとする『日本文学ふいんき語り』や、『仕事を100倍楽しくするプロジェクト攻略本』等、ゲームという視点から幅広い活動を見せる。
<http://blog.lv99.com/>

ナカシマカズユキ Nakashima Kazuyuki

67年生。作品によりまったく異なるテイストに描き分けるイラストレーター。以下のURLにはムチムチプリプリしたキャラクターたちが勢ぞろい。
<http://www.nk-w.jp/>

ジ近く！）は、その対話に終始するのだが、語られるのは事件の概要だけではない。妖怪、心理学、民俗学、脳、言葉、量子力学、さまざまな話題が縦横無尽に繰り広げられる。

“二十箇月もの間子供を身籠っていることができると思うかい？”と関口がたずねる。

京極堂は、こう答える。

“この世には不思議なことなど何もないのだよ、関口君”

京極堂は次のようにも語る。

“つまり人間の内に開かれた世界と、この外の世界だ。外の世界は自然界の物理法則に完全に従っている。内の世界はそれをまったく無視している。人間は生きて行くためにこの二つを巧く添い遂げさせなくちゃあならない。”

このようにも語る。

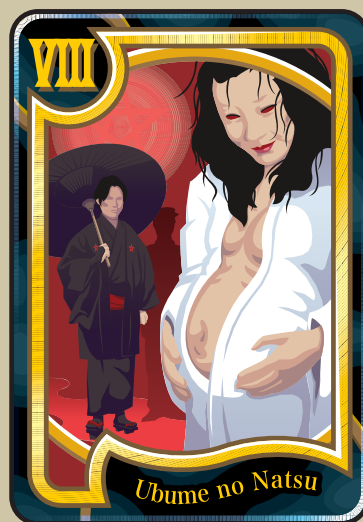
“我^{しゆ}の内なる世界は言葉という呪いによって覚醒したが、外なる世界もまた科学という呪いによって覚醒したのさ。人間がいなけりゃ世界はとも^{うろん}も胡乱なものだということさ。”

そして、この分厚い小説は、内なる世界と外なる世界を添い遂げさせるための、また新しい呪としての言葉の集積だ。

クライマックス。あまりにも常識からぶっとんだ出来事が起こって、何が起こっているのかわからないぐらい混乱し、何だ何が起こってるんだと巻き込まれるようにして情景を幻視して、その直後、京極堂が謎を解き明かし、それが何を意味していたのか理解できた瞬間、驚愕にうち震える。

読み終える。また時間が動き出す。そのことにも、強く悲しみを覚える。落下していく自分の身体。

そして、少女が地面に強く叩きつけられた。



To be continued.

わたしたちの体育

青木 淳悟

Aoki Jungo

第4回 「池袋自主トレ風景」

日陰のない交差点で信号待ちするのさえない季節になった。

昼下りの南池袋1丁目交差点。ジュンク堂書店前から駅側に信号を1つ渡り、続けてもう1本、明治通りを渡る信号で1、2分待たれることがよくある。交差点自体は五差路ながら、ここで二股に分かれる道路を2本とも横断するのに、股の付け根部分の安全地帯で信号待ちすることになるわけだが、この小さな三角形をした歩道の飛び地に夏の日差しを遮ってくれるものはない――。

そもそもどんな用があってこの暑いなかを昼間から池袋まで出てきたのか、しかも池袋駅構内からスタートするのではなく、どうして「東通り」「AZUMA」との看板を掲げる比較的細い道から当の交差点にたどり着いたのかといえば、池袋駅徒歩圏（15分程度）に住んでいるから、としか答えようがない。自宅を出て、寺や墓の多い南池袋エリアから歩いてくると、このあたりがちょうど繁華街への入り口となる。例えば外気温30度を超える真夏日、こんな街中で果たしてどういった活動メニューを用意できると考えられるか。

池袋周辺に引越して2年目、今年の夏こそあの屋内施設の区民プール（健康プラザとしま）に通おうと計画しつつ、夏本番を迎えてみると連日の猛暑であり、行き帰りだけでも大変そうだと早くも諦めてしまっていた。清掃工場に併設された温水プールというよくありがちな立地も不便で、地図で見ると池袋駅の北側に架かる池袋大橋のすぐ先なのだが、東口から行くにも駅西側の北口から行くにも跨線橋を上って線路を越える必要がある。

どの経路で近づくにしろ何かのついでに立ち寄れるような場所ではなく、まるで線路と高架道路で隔絶された印象である。つまりは、そこまでして本当に泳ぎたいかどうか、高い意欲を持たなければ体育の習慣は決して身につかない、ということらしいのであった。

炎天下の日中に外を動き回れば確実に体力は消耗するし、執筆の習慣、集中力、創作意欲さえ失いかねない。かといってずっと自宅ばかりでは外部からの刺激を得にくい。だから整然とした図書館の雰囲気も執筆環境には不向きといえる（単純に外に出たいと思ってしまふ）。ただ気分転換が必要なものかもしれないが、今日もカバンにノートPCを忍ばせ、あまりラフ過ぎない格好で家を出ると、道々に日陰を選んで進みつつ、ランニングシューズを履いた足でついここの南池袋1丁目交差点まで歩いてきてしまった。

信号に従って明治通りを横断したあと、脇道から西武別館に入るか、通り沿いから西武百貨店本館に入る。もしくは、初めから交差点の信号を渡らずに、ジュンク堂のある通り沿いに口を開けている「39番出口」に入る。この殺風景な地下通路の途中には、かつてのキンカ堂に直結していた「40番出口」もある。こうして日を避けて地下に落ちると俄然行動力がアップする。これは外気温の上昇とともにいつしか習慣化されていた、屋内空間でのウォーキングへとつながっていく。

西武百貨店では足早な人間を本館1階の婦人化粧品売り場に入れさ

せないように、地下の連絡通路を十分に確保し、池袋駅構内との往來をスムーズなものにしている。この導線を地下1階のフロア作りに活かしているのが書店のリプロである。これらをグーグルマップのストリートビュー機能では見られないのが残念だ。

池袋駅はほぼ全面的に地下の構内自由通路でJR各線と私鉄、地下鉄とを連絡している。南北方向に並列するJRと西武線、東武線の駅に、東西方向に伸びる東京メトロの地下鉄三路線の駅がクロスした格子状の構造を成す。構内店舗が多いのは西武百貨店側のISP（池袋ショッピングパーク）と東武百貨店側の池袋東武ホープセンターだが、加えて東武側にはリニューアルしたプリズムガーデンという地下広場や、2009年開業のエキナカ商業施設であるエチカ池袋があり、メトロポリタンプラザも10年にルミネとして生まれ変わったりと、オシャレ度は明らかに西側が優勢だといえる。パリの町並みを模したというエチカの通路を突き進んでいった最奥の出口はマルイシティ先の立教通りに通じていた。立教大学はすぐ。こんな通学路があるとは信じがたい。

池袋駅構内とそれに直結する大型商業施設群は、JRの駅からやや西側に外れた地下に東京メトロ副都心線の駅があることから、その地上の西口五差路交差点の一角に建つマルイシティまでを連絡している。一方東側だと旧三越、現ヤマダ電機LABI日本総本店までに留まっている。その途中の地下街の名称がISP。そこからサンシャイン60階通り沿いにある東急ハンズまでの300mほどは地上部分を歩かなければならない。東急ハンズ脇にはサンシャインシティに通じる地下通路がある。

やがて、仕事を求めて地下街を巡ることに飽きてきた頃に、広大で複雑な屋内空間という共通点から、東池袋のサンシャインシティにまで足を伸ばすようになっていた。この複合施設にはオフィスビルのサンシャイン60のほかに、その足元を覆うように広大な床面積を誇る低層の商業施設があり、1フロアの移動だけで相当な運動になる。夏場だからと空調の効いたジムで屋内トラックを走ったりウォーキングマシーンを使う必要などないのではないかと――。

建物内の地理に詳しくなっていくうち、ここもいつか「クリアー」してしまうことになるかもしれないと恐れ出すと、訪れる頻度をなるべく下げようというインセンティブが働く。こうなると居心地がいいのか悪いのか正直よく分からなくなってくる。出掛けるのが億劫になりかけ、創作意欲の減退を疑い始めているこの頃、複合施設の一つである文化会館に入るジム、コナミスポーツクラブ池袋のプールに注目している。調べてみると、特別会員や正会員の月会費はやはり高いが、「アクアクラブ」だと区民プール11回分の回数券とほぼ同額で、1ヶ月の間プールと浴場とサウナが利用でき、なおかつ「都度利用料」はないのだという。スポーツジムは利用ごとに料金を払うものかと思っていたので、これこそ強力なインセンティブだと、今後は「3日に1度以上」、PCも持参しつつ通うことになるかもしれない。♂

講談社 ◆ 話題の文芸書

『三国志』より六百年前、心躍る英傑の物語



湖底の城

呉越春秋

goetsu shinjū
kotatsu no shiro

宮城谷昌光

父と兄を処刑された伍子胥は復讐を誓う。
つぎに楚都にくるときは、
楚を滅ぼすときだ
信念だけが頼りの、感動を呼ぶ放浪篇！

定価各1,680円(税込)
ISBN(≡)978-4-06-216345-3
ISBN(≡)978-4-06-217075-8
ISBN(≡)978-4-06-217777-1

第一巻・第二巻
好評発売中！

講談社 〒112-8001 東京都文京区音羽2-12-21

HR

たいいく

ぼうけん

かていか

げんしや

としよ

日直から。

今号の日直
大原ケイ

Looking for the next Murakami ——「熱意」と「売り込み」で世界への扉を開く

Key Ohara

ニューヨーク在住の文芸エージェント。日本の著者・著作を海外に広めるべく奮闘中。米国出版業界の裏事情、NYローカルネタ、日米文化比較に関する記事を新聞、雑誌に幅広く寄稿。著書に『ルポ 電子書籍大国アメリカ』等。ブログ:「本とマンハッタン」、ツイッター: Lingualina。

欧米の編集者によく訊かれる質問がある。「次なる“ハルキー・ムラカミ”は誰?」と。つまり、何カ国語にも翻訳され、世界中の人々が等しく楽しめそうなリテラリー・フィクションの著者は日本に他にいないのか、と訊いているのだ。私もその答えを知りたい。

とりあえずこの質問には、「彼の場合は“パーフェクト・ストーム”でも呼ぶべきかなり特殊なケースだから、日本国内にも彼ほどの人はいない」と答えてお茶を濁している。村上春樹という作家は、日本国内での人気はもとより、フィッツジェラルドやチャンドラーの作品を自ら邦訳し、英語圏での自分の担当編集者を通してICMの辣腕リテラリー・エージェントと契約し、国内でも滅多に行わないプロモーション活動を積極的にこなし、海外の文学賞を受賞し、招待されればイスラエルで世界平和を訴えるスピーチをするという唯一無二の活動あつての知名度なのである。

もちろん、日本の現代文学を代表する作家は彼だけではないのだが、残念ながら今の日本に同じようなステップを踏んで自ら世界へ出て行けるキャパシティを持った書き手がいるとは考えにくい。だからこそせめて周りが取っ掛かりを作ることではできないだろうか、と切実に思う。自国の文学を世界に紹介する事業を後押しするのは、それなりに成熟した国家であれば当然のことだし、縮小する一方の国内マーケットを鑑みれば、外国語に翻訳されることは作家にとっても望ましいことだろう。

ところが先日、まさにそういう活動を行っていた文部科学省のJLPP (Japanese Literature Publishing Project) が「仕分け」される体たらくとなってしまった。有識者とやらが「もう既に民間の手で十分な数の現代文学作品が欧米にも紹介されている」「日本の優れた作品であれば、税金を使って政府が手助けをしなくても、勝手に翻訳されるのでは」などと発言するのを聞くに当たっては、それは甘い、実に甘すぎる見解だと言わざるを得ない。

何しろ、欧米の出版社の編集者には、私の知る限りにおいて、日本語の作品をすらすら読み評価できる語学能力を持った者は誰もいないのだから。どうやって出すべき作品を選び、優れているかどうかを判断できるというのか。日本語の作品を読み、レポートを書くリーダーを使う編集者もいるが、リーダーは翻訳が本業であることが多く、自分が手がけたい作品を持ち込んでくるケースが多いので、和訳で著名な日本の翻訳家ほど知名度もなく、信用されていないところもある。

そうなると日本側が発信する情報だけが抛りどころだが、これがなんとも心許ない。ベストセラーリストや、人気のある作品を海外向けに紹介する政府刊行物は出ているようだが、読まれているとは言い難い。そもそも今の時代にウェブサイトやSNSを活用せずに海外にアピールできるはずもないのだが、律儀に紙に印刷された冊子や、知りたい情報にたどりつけないホームページばかりが目につく。

例えば、芥川賞や直木賞が発表されても海の向こうにいと、著者や著作の名前を聞いたとてどんな作家が選ばれたのか、どのような作品なのか、知るよしもない。そもそも出版社がスポンサーとなり、作家仲間が選ぶ文学賞はもとより信用されない。

ひとつ理由をあげれば、日本側がいくら「文化事業」という威信をかけて訴えても、欧米の商業出版ビジネスに対しては通じないということがある。出版社であっても私企業なので、赤字覚悟で文学的価値だけを判断基準に本を出すわけにはいかない。ましてやそこに翻訳代というコストが加わる。たとえどんなに編集者が気に入った作品であっても、出してみただけでさっぱり売れませんでしたとなると、そのうち編集者がクビになるというシビアなビジネスだからだ。

だからこそ、いったんこの著者にコミットするとなると、何作も出し続ける。いったん作品が英訳されてしまえば、直接日本語からヨーロッパの他の言語に翻訳するよりも可能性が広がる。一般書の大手版

元であれば、処女作でも数万冊の初版部数が見込める。

重く堅い扉ではあるが、なんとか開けることができれば、そこには日本国内とは比べものにならないマーケットが広がっているのだ。その扉を叩くことさえ止めてしまうと、JLPPの末路が残念でならない。

それはさておき、日本文学への関心興味が些かでも「クールジャパン」の動きにつながるかどうか個人的には疑問だ。90年代から、欧米でも「やや」高まった日本のアニメ・マンガへの関心が文字コンテンツにも向けられ始めたことは確かだ。それまでもマンガや児童書の部門では、文字が読めなくてもビジュアルな側面は評価できるので、日本の作品は海外に出て行きやすかった。

加えてハリウッド映画が日本の映画をリメイクしたり、「料理の鉄人」やバラエティゲームショーのアメリカ版を製作したり、マリオブラザーズやソニックのゲームを通して、文字コンテンツにも欧州にはなかった面白いものがあるのではないかと気づきはじめた編集者は確実にいる。問題は、その編集者たちにピンポイントで彼らが探しているようなコンテンツを届けられるかにかかっている。

JLPPのような試みが、店を開いて店頭商品に置くようなものだとすれば、それが売れる(海外で出版される)ためには、どの客が何を探しているのかを知る必要がある。

これが本以外のものでは、市場ニーズを探るマーケティングが必要だということになるのだが、日本の現代文学を海外に紹介しようとする団体は一方通行の宣伝しかしていないように見受けられる。欧米の書籍マーケットと言っても様々だ。どの国では、どんな本が広く読まれているのか、どんな作家が人気なのかを知るのはいきなりではないだろう。

では、どういう作品を売り込めば興味を持ってもらえるのか? これまでに私がエージェントや編集者から聞いた答えをまとめると「グレートストーリー」、ということに尽きる。オリジナルの言語が英語でなくとも、ウンベルト・エーコやガルシア・マルケスが世界中で読まれていたり、『ハリー・ポッター』シリーズが子ども向けの作品であっても広く人気を勝ち得ていることからそれはわかるだろう。

日本の作品だからといって、ゲイシャ・フジヤマ的な小道具が揃っていればいいものでもない。村上春樹の作品などは、既にオリジナルが日本語であることを意識していない読者も多い。全てはそこに応援したくなるような主人公がいるか、感情移入できるキャラクターがいるか、波瀾万丈なプロット展開の末、胸のすくような結末があるか、なのである。そして現代文学であるからには、今の日本に何が起きているのか、そこに住む人が何を思い、どんな暮らしをしているのかが浮かび上がってくれば理想的だ。反対に、平凡な生活の中で揺れ動く心の機微を綴っただけの作品や、ゲームのように決まり切ったキャラが出てくる連作短編集などは対外的にあまりニーズがないと言えるだろう。

もちろん、これが日本の現代文学の心髄だと、熱意を持って伝えていくことも重要だ。ただ、日本文学者で外国語も操り、それを訴えられるキャパシティのある教授は皆無に等しい。ここでも翻訳というワンクッションで背中を一押しする必要があるだろう。

海外に向けて自国文化を放出するパワーは、経済力と比例することもまた悲しいかな、現実である。そういう意味では、今日本の文学は、めざましい経済発展をしつつある中国や、国を挙げて国際化に取り組んでいる韓国に「アピール」という点で遅れをとっている。だが、コンテンツの成熟度という点ではまだ日本に勝る段階ではない。自画自賛を良しと思わぬ、謙虚さもいいが、本当に日本の文学を楽しみ、世界の人ともそれを共有したいという思いがあるのなら、もう少し「売り込み」に力を入れて欲しい。待っているだけでは日本の本は海外に出ていけないのだから。❧

